

り他國の石橋といふは壹枚石にてかけたるものなるに、長崎の石橋は小き石を切りて、石がきのごとく疊て、兩方より合せたるなり、長き橋はふた筋に水を通ずるなり、是を目がね橋といふ。唐繪にゑがく所の橋は、大かた此風なり、下より水溢るれば崩る、事もあれども、上よりはいか程重き物をのするといへども、動き破る、事なしといふ、誠に大河にはなるまじけれど、長崎の川は大かた京都の堀川程の大さなり、萬代不壞の橋なり、もとは唐人來りて作れりといふ、彼地は柔らかなる石たくさんなるゆへにや、京などにても此ごとき橋を作らば、破損の憂なくしてよかるべきものを、

〔都紀行一〕廿三日、○年正月久四けふしも少しく雪もよひなりしが、午時の頃より晴しかば宿立出て、西本願寺の廟所なる西大谷へ行んと、五條坂を登り、境内に至れば蓮池あり、こゝに眼鏡橋とて石組にて橋杭なく、丸く大ひなる穴二つ明きて、眼鏡の形に似たる故名づけしよし。

〔信長公記十二〕天正七年十月廿五日、相模國北條氏政、御身方之色を立られ、六萬計にて打立、○中武田四郎も甲州之人數打出し、富士之根がた、三枚橋に足懸り拵對陣也、

〔寛永諸家系圖傳三〕天正十年大權現○康川駿州を領したまひ、駿河伊豆の境にて要害之地を見立、三枚橋に城をきづき、○下略

〔東海道名所記二〕沼津より原まで一里半、この宿の入口に三枚橋あり、

〔江戸砂子三〕下谷

三枚橋 忍ぶ川にかかる

〔紫の一本橋〕三枚橋 下谷本通り肴町の先より、東の方の小路へ出る所に橋あり、此橋をわたり、右の方おから町へ入所に橋あり、又其橋の下和泉橋通りへ出る所に橋あり、此三つの橋をむかし板一枚づゝ渡しかけたる故、三枚ばしといふといへり、別に又由緒あるしも玄らず、此近處の町をおしなべて三枚橋といふ、